

野生獣の誘引および福岡県内捕獲獣の肉質

○笠正二郎・増本憲考¹⁾
(福岡農林試・¹⁾福岡農林試資源セ)

【目的】

野生のイノシシ・シカによる農作物の被害が甚大なため、全国的に有害獣の捕獲奨励が行われている。我々は、有害獣を効率的に捕獲するために、市販の香料等で誘引する方法を検討した。また、食肉として市販されている獣肉の状況を把握するため、福岡県内で捕獲され公設施設で処理されたイノシシおよびシカ肉の肉質分析を実施した。

【材料および方法】

＜試験1＞2013年9月から2014年3月に福岡県中央部の中山間地に位置する福岡県農業総合試験場内において、草地圃場周囲の自然木に自動撮影装置を設置し、市販香料、発情豚の粘液、オス性ホルモン等を地表面にスプレーしたり、地面から60cm程度の竹棒の先端に香料等を含ませた脱脂綿を設置して野生獣の誘引反応を観察した。

＜試験2＞県内4獣肉処理施設で処理されたイノシシ(17検体)、ニホンジカ(12検体)および豚肉(対照)の肉中遊離アミノ酸、ジペプチドを定量した。また、放血具合を観るために肉中のヘモグロビン(Hb)を定量し、捕獲者、捕獲期日、と殺手段、雌雄、処理施設、体重およびと殺後冷却の有無等について検討した。遊離アミノ酸およびジペプチドは肉を除タンパク後自動アミノ酸分析装置で、また、肉中Hbは血清用分光光度計キットを用い測定した。

【結果および考察】

＜試験1＞野生獣の多くが種々の誘引資材に興味を持ち臭いを嗅ぐなど反応が見られた(図1,表1)。スプレー噴霧による誘引は持続性がなく、反応が悪いが、竹棒での希釈香料には良好な反応が持続した。しかし、香料のみで現物が存在しないことを学習すると誘引効果は持続しなかった。また、野生獣の出現頻度が低い場所での誘引反応は弱かったため、誘引効果を上げるには事前調査で出現状況を把握することが必要と考えられた。

表1 野生獣の誘引物質への反応と持続性

資材	設置方法	イノシシ	シカ	持続性
ミルクフレーバー	スプレー	±	-	一晩
	竹棒	+	-	2~4日
サツマイモAフレーバー	スプレー	±	-	一晩
	竹棒	++	++	2~4日
サツマイモBフレーバー	スプレー	+	±	一晩
	竹棒	++	++	2~4日
柿フレーバー	スプレー	+	+	一晩
	竹棒	++	++	2~4日
ベリー系フレーバー	竹棒	++	++	2~4日
集魚剤ミミズ	スプレー	+	+	一晩
	竹棒	++	++	2~3日
発情粘液	竹棒	++	+	1~2日
アンドロステノン	竹棒	++	+	1週間以上

反応(嗅ぎ行動) 反応なし:-、遠くで嗅ぐ:±、滞在時間長い:+、顕著に嗅ぐ:++

＜試験2＞肉質では、肉中遊離アミノ酸はイノシシ、ニホンジカともに個体差が大きい。豚肉と比べイノシシは高値を示し、捕獲獣の発育、食性ならびに保存等の処理方法の違いによるものと考えられた。筋肉中Hbはと畜豚より高値を示し、と殺手法や捕獲者により個体差が大きかった。また、ニホンジカはイノシシと比べ高値を示した(図2)。



図1 誘引資材に興味を示すニホンジカ

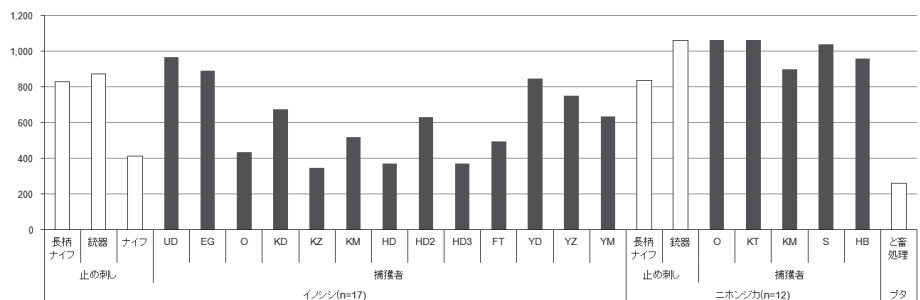


図2 肉内ヘモグロビン量(mg/dL)